－所蔵作品紹介－

菅原　弘記　SUGAWARA Kōki

植物の内部

しょくぶつのないぶ

作品データはこちら

菅原弘記は日本画家・菅原無田の子として札幌市に生まれ、旭川市で育ち、旭川で長く抽象絵画を描き続けている画家である。また、1955年に旭川の若手作家による前衛美術グループ「黄土（おうど）」結成に参加した（1967年解散）のをはじめ、翌年より出品を始めた北海道アンデパンダン展の運営を担い（1966年同展は活動中止）、1973年の北海道抽象派作家協会創立の中心の一人となる（1993年離会）など、実務的な面でも地元の前衛美術運動振興に力を尽くしてきた。

ここにあげた作品は1961年の制作である。いまだ60年安保闘争の余波が残る落ち着かない時期であり、「当時はデモとか、討論集会などの参加に追われ、制作にかける時間は少なかったが、青い時代の騒ぐ血をどこにぶっつけようかと、バイタリティのみが先走っていた」*1という。確かに画面に見える原色の対比と粘っこく流動するようなマティエールは、昂（たかぶ）りまた鬱屈する感情を伝えて余りある。小品とはいえ、社会にとっても画家にとっても熱かった時代の、生々しい証言といえよう。

またタイトルと画面の印象からは、ミクロの生命活動―例えば水や養分が流動する様子―をのぞき見て拡大したような、具体的イメージが呼び起こされるのも確かである。当時作者は「生物の成長期に発散する異様な断面」と「無性生殖の神秘的な世界」*2に心を惹かれていた。「異様」で「神秘的」で、おそらくはセクシャルでもある生命のヴィジョンに形を与えること。それも感情表出とならんで、菅原にとってアンフォルメル絵画の可能性だったようだ。

*引用は１菅原弘記「私の１点」（『北海道新聞』1994年12月９日夕刊）、２菅原弘記「的（マト）…爆焼・消滅」（『第22回北海道アンデパンダン展』小冊子、1962年）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より